

# 演劇・映画が好きになった理由

## 2



1960年公開『向阳花开(ヒマワリが咲く 脚本：趙清閣)』

## 映画脚本を書く望みが叶った。

抗日戦に勝利し私は上海に戻った。その年のはじめに社会経済が不安定になりインフレが起こり、原稿料は安くて文章を書いて生活するのは容易ではなかった。1947年、私の健康状態は悪く気分も落ちこみ、筆で生計を立てることへの興味も失われつつあった。

「秋風秋雨愁煞人①」のある日、突然洪深が慌ただしく私の家に走ってきた。復旦大学の「反飢餓運動」に参加したために政府から警告を受け、上海を離れなければならなくなった。それで二つのことを手伝ってほしい、と言いにきたのだ。一つは、演劇専門学校（現在の上海演劇学院）で講座を持っているので代講をしてほしい。校長の熊佛西③も同意している。もう一つは「大同(大同影業公司)」の製作主任の張石川④に映画の脚本を書くように頼まれているので、それを私と共作することに決めた、というのだ。私が同意するかどうかについて意見は聞かなかった。

いつもと同じく、彼の考えは熟考されたあとの結果であり、相談の余地はなかった。この「老夫子（家庭教師や塾の教師に対する尊称）」が率直な人あることはすでに知っていたので、この話を受けたくなくてもすぐに断ることはできなかった。（「老夫子」というのは私と同世代の人たちがみんな彼に対して使っている呼び名だから私も使わせてもらおう。自分を師と呼ぶことを彼は許さないのだが、私はずっと彼を師として尊敬していた。）

私は心の中で、彼が行ってしまったら熊佛西のところに行って、私は正式に学んだ経験もないし口下手でもあるから講義をすることができない、と言おうと考えていた。脚本の合作の話も信じられなかった。彼は専門家だ。私のようにまったく経験のない人間とどうやって合作ができるというのだ？ だが、彼は私の考えを見透かしたように、私が答える前に厳粛かつ断固とした口調で私に告げた。

「ためらう必要はない。君が経済的に困難なことを知っている。教えることで少しは収入の足しになるだろう。映画の脚本を書くことは十数年前の君の望みでもあった。そのときはちょっと君を励ましたけど、いまは君と合作をするのだ。」

これは彼が私を助けるためにやってくれたことだったのだ。私は文芸映画が好きだったので、以前上海の中電三廠<sup>④</sup>に脚本を送ったことがあるが、採用されなかった。それで洪深は私にチャンスを与えてくれたのだ。私はすぐに承諾した。彼は翌日に脚本のことを話そうと言った。彼の親切に私は感動した。彼は私の生活を気づかせてくれていただけでなく、私の創作の望みにも関心を持っていてくれたのだ。彼は真に私の忘れ難き師であり、よき友だった！

①「秋風秋雨愁煞人」は陶宗亮（1763～1855）が詠んだ詩の中の一句だが、女性革命家秋瑾（1875－1907）が詠んだことで有名になった。「秋の風、秋の雨は人を憂鬱にさせる」という意味。

②熊佛西（1900－1965）……劇作家、演劇教育家、中国演劇の開拓者の一人。

③張石川（1890－1954）……中国映画事業の開拓者、映画監督。

④中電三廠……中電とは1933年から1949年まで国民党が持っていた映画製作所「中央電影企業股份有限公司」の略称で、もともと南京で組織され、抗日戦勝利後に既存の映画会社を吸収して上海に二か所、北京に一か所の撮影所があったので中電三廠と呼ばれていた。

洪深が脚本について語るのはとても面白かった。彼はひっきりなしにたばこを吸い、茶を飲み、茶菓子を食った。このようにしていると考えがまとまるのだと言って張り切って話しはじめた。まず彼が、自分が考えている、まだ完成されていない物語のあ

らすじを述べる。三人の女性を創造する。すべては実際の人物で私がよく知っている人たちをモデルにするので、素材は豊富だ。もちろん彼も多くの似たようなモデルとなる人物を出してまとめる。彼が私に彼女たちについて話す。それを聞いて私が彼に一連の問題と私の見方、考え方を言って、私たちは真剣に考え分析する。

二人の考え方を統一させ、最後に彼が脚本の初稿を書くように私に告げ、辛棄疾(南宋の詩人)の詩に出てくる「幾番風雨」を題名にして、当時の情勢と現実社会の意義を描き出すことにした。

彼はすぐに厦門へ発ったので執筆過程でいつでも自由に彼の教えを受けるということができなくなり、草稿ができた時点で彼に郵送して決定稿を書いてもらい、私たちの合作はやっと一段落した。私の書いた最初の原稿の水準は高くないため決定稿の質にも影響を及ぼし、これに関して私はとても後ろめたい気持ちでいた。



『幾番風雨(幾度もの風雨)』は1948年に、何兆璋<sup>⑤</sup>監督、謝晋<sup>⑥</sup>助監督のもとで撮影が開始された。これは私が書いた文芸映画用の脚本第一作目だった。つづいて「大同」が私を脚本家として採用し、私の長年の望みがついに叶えられたのだ。

## 新しい経験

1949年～52年まで、私が書いた脚本は旧社会の娼婦の悲惨な生活を描いた『蝶恋花』、抗日戦宣伝の『自由天地』、新中国讃歌の『女兒春』はすべて黄漢<sup>⑦</sup>が監督し、「大同」が出品した。1960年と63年に『向陽花開』と『鳳還巢』二編を書いた。それ以外にも製作に至らなかったたくさんの脚本を書いた。

去年書いた脚本『粉墨青青』は1979年の『西湖月刊』第一、二号に発表したもので、北京映画がもともと製作する予定だったが、意見が出されて書き直しをした。それからなぜかそのままになっている。



『向陽花開』

⑤何兆璋(1915-)……録音技師として映画会社に入ったが監督不足の時代、張石川に作品製作を任せられ成功したことで認められ、監督となった。

⑥謝晋(1923-2008)……映画監督。1986年『芙蓉鎮』や1991年『乳泉村の子』の監督として日本でも知られている。

⑦黄漢(1915-)……1929年に上海明星影片公司に入社し映画編集技師として研鑽を積み、1939年からは監督として20作あまりの映画を作った。

映画の脚本は、その他のジャンルの文芸作品よりも人を感動させる芸術的な魅力を持っていることが実際に証明されている。特に映画が撮影された後においては。

ただ、映画の脚本を書くのは非常に難しく、監督が納得し各方面の人々が満足するまで往々にして十数回の書き直しが要求されることもある。何度も書き直し修正し、数十万字を書く苦勞をしたあとに完成した脚本がボツになることも時にはある。

文芸映画は、小説、演劇とは違っているが、共通点もある。共通点は両者ともに「考えていることをイメージして作品にする」ということである。異なっている点は、「文芸映画のほうはイメージするとき立体感と“画面感”が伴う」ということである。

構想を練り脚本を書く準備ができるまで、脳裏には画面が現れてくる。脚本が映画になるのは再創造だ。基本的な内容が視覚に訴えるイメージになり生き生きとスクリーン上で再現される。映画の成功と失敗は脚本が重要な鍵となるが、監督、俳優、録音、美術などなど、映画に従事する人たちすべての合作であることが非常に重要だ。

まず脚本と監督が協力しなければならない。両者の密な関係と相互理解、互いに尊重し合って協力する体制の下で、映画の品質が保証される。私は今、洪深が昔言っていた映画の再創造の意味が理解できる。だから私にも監督を学ぶように励ましてくれたのだ。脚本が良くても監督が良くなければ理想的な作品とはならず、脚本があまり

良くないときでも監督がうまくやれば映画は成功する。これは私が脚本を書く仕事に就き、監督と合作して作った経験から得た教訓である。

映画は新しく興った一種の総合芸術であるため、時代の進歩、科学と文化の発展という状況の飛躍に従い、映画芸術も飛躍を遂げなければならない。最近見たいくつかの外国の優れた映画がそのことを物語っている。国内で「四つの近代化(農業・工業・国防・科学技術の4部門で近代化をはかること)」が開始されたとき、考えずにはいられなかった。映画芸術においても近代化の問題が起こっているのではないだろうか。見たところ確かにそうだ。そうでなければ中国の映画事業の前途は楽観視できないし、すでに映画事業の経営改革と制度の問題を提出している者もいる。これを考えることは必須であるし、両者は互いに補い合いって成立するものである。ほかにどんな映画芸術の改善策があるだろう？

特に重要なのは脚本家の状況改善である。誰でも知っているように、一般に優れた脚本がないので、人々が喜んで見るような素晴らしい映画をつくることができないし、期待される効果もなく創作の使命を果たすこともできない。

大衆は最も公平な批評家で、ロコミで良い映画のボランティア宣伝員となることができるし、映画を見ない権利も持っている。それでは、どのようにしていいシナリオが書けるだろう。私は、脚本家の考え方も新しくなることが要求されると考えている。内容と形式が合っていること、健康的であること、脚本として完成されていることなど。脚本家には群衆の視点を持っていることが要求される。群衆の鑑賞能力が高まっているのを認めてはじめて、大衆を満足させることができる。

一人の「魂の技師」映画劇作者として、脚本家は状況の変化、飛躍を見るだけではなくそれを先取りすべきだ。そうでなければあなたは立ち後れ、大衆に受け入れてはもらえないだろう。長々とひきずるように書き、一回の撮影で上下二本を撮るようなことをすれば、それは映画の内容が有益であるかどうかに関わらず、ただ自己満足するために作ることと同じだ。

客観的な効果を考えることもなく、観客が好きか嫌いかを考えることもない。そうやってできた映画を、長時間を費やし神経を集中させて座って見ていただけるだろうか。

指折り数えてみると、私が脚本書きの仕事をしたのは十数年から二十年近くだが、撮影され封切られたのはわずか六、七作にすぎない。数量や質も十分なものではない。困難を知って退き、病多き老いの身となったのもうこれからは書くことはできないだろう。しかし私は今も文芸映画が好きだ！

一九八一年一月